

3章

【問題】（演習）

出典：『伊勢物語』 第九十四段 / 東京大学 前期 90年・改題

現代語訳

昔、ある男がいた。どういう事情があったのであろうか、その男はそれまで通っていた女のもとに通わなくなってしまった。（女の方には）その後別の男ができたけれど、（前の男とは）子供をなした仲であったから、親密にというほどではないが、時々は便り^{*}をよこしていた。（ある時、前の男が）女の所に、（その女は）絵を描く人だったので、絵を描いてくれるよう使いをつかわしたが、ちょうど今の男が来ているからと言って、一日二日描いてよこさなかった。（すると）前の男は、「まったく薄情な。私がお願ひ申しあげた絵を、今まで描いてくださらないので、それをもっとだとは思いうけれど、やはりあなたを恨みたいような気になりました」といつて、からかって詠み、送った歌。季節は秋であった。

秋の夜は……別の男と一緒に過ごす秋の夜は、私と過ごしたあの春の日のことなど忘れるほどのものなのか。春の霞にくらべたら、秋の霧の方が幾重にもまさって感じられるのだろうか。

と詠んだのであった。女の返歌。

千々の秋……たくさんの秋をあわせても、一つの春に對抗できません（か）。（けれども）秋の紅葉も、春の花も、どちらも散ってしまうものです（「あなたの方が素晴らしい人と思っ

ていますが、所詮、二人とも私から離れていく存在なのですよ。」）

〔訳注〕

*便りをよこした——「男から女への便り」「女から男への便り」両方の解釈がある。ここでは、「二人のやり取りが続いていること」を押さえる。

※テキスト3行目につきまして、以下のように修正した問題文（および解釈文）を掲載しました。

「かの男、いとつらく、『おのが聞こゆる……』とて」（東京大学入学試験問題）

←

「かの男、『いとつらく。おのが聞こゆる……』とて」（本テキスト・解答）【新古典文学大系（岩波）に拠る】

解答

問1 男がそれまで通っていた女のもとに通わなくなってしまったということ。〔解答例〕

男がそれまで通っていた女と疎遠になってしまったということ。〔別解例〕

問2 私が描いてほしいとお願い申しあげた絵を、いまだに描いてくださらないので、

問3 今の夫も前の夫も、所詮自分から去っていく人であるという、男の愛の頼りなさを達観する気持ち。〔45字・解答例〕

出典：『とりかへばや物語』(四) 冬の巻 「第三章 権中納言のその後」の冒頭部の一節 / センター試験 本試験 91年・一部改題

現代語訳

その日(「大将が二人の姫を都に迎える日」)になって、(姉君が新居に)お移りになる儀式はとてもすばらしく、中の君(「妹君」も(大将は)後にお残しになるつもりはないから、お連れ申し上げてご出発になる。女君(「姉君」は、やはり、「さて、(これから)どうなることであろうか」と重苦しくばかりお思いにならずにはいられないが、父宮も、今後の身の振り方をご思案になっいて、「(あなたは)もうどうして再び戻ってこの庵を御覧になることができましようか。私自身も、都に出て行くことのできる身ではございませんので、これが顔を見ながらお話をする最後でございましょう。(私は)長い間離れがたい束縛(「あなたたち娘」と関わり申し上げて、来世をたのむ仏道修行も自然とおろそかにしておりましたが、これからは、一筋に仏道のお勤めができます身になりますから、とても嬉しいことですよ。）」と言って、お泣きになり、

行く末も……(大将につれて行かれて、幸せな)将来が遙かに続くにちがいない(あなたとの)別れにあたって、またお逢いすることがいつともわからない(のが悲しい)ことよ。

と言って、「今日は不吉な言動を慎まなくてはね」と、(涙を)拭ってお隠しになった。女君は、

あふことを……再会がいつともわからない別れ道では、行く(私の)方も、どちらの方角へ向かうのかもわからないほど、泣きながら出て行くのですよ。

と、袖を顔に押し当てて、ご出発にならない。妹君は、

いづかたに……(私は、父宮と姉君の)どちらに身を委ねたらいいのでしょうか。ここに残(つてお姉様と別れ)るのも、ここを出(てお父様と別れ)るのも、どちらも名残惜しい別れです。

(妹君)「ご自身は必ずしも、急いで出発しなくてはいけない身ではないのだが、姉君に少しでも離れ申し上げては、たよりのない気持ちにするにちがいないのも当然なことで、父宮も、「このままこの機会に(妹君を)お移し申しあげて、私の方は、一途に思い残すことのない状態に(しておこう)」とお思いになって、しかるべき(「身寄りもなく、そのまま居残って後世を祈りながら余生を送るの

がふさわしい」年をめした女房などでさえも（庵に）お留めにならず、（姫たちと共に）出発させなされた。

大將殿は、姉君と同じ御車でご出発になる。出車十台、童、下仕えなどまであとに続き、この程度の草庵から御出発になるご様子としては、大層堂々として威勢が強く、しかるべき（＝相応の、りっぱな）殿上人が、五位、六位などまで非常に多くお供している。女房も、縁故を求めて感じのいい人たちを探し出してはお仕えさせた。妹君の御車は、（姉君のよりも）少し遅れて（続き）、出車三台程が（その後に）続き、これもしかるべき（＝相応の、りっぱな）人や前駆の人たちなどを沢山引き連れて進み、年寄りたち（＝先程の老女房のこと）は、この御方（妹宮）付きの女房となってこっそりと参上するのだった。父宮は、とてもうれしく、（待っていた）甲斐があるとお見送り申し上げになる。（父宮は）名残なく澄んだ気持ちになり、（一人取り残されて）心細く思ってしまうものの、（今まで）熱心に仏道修行しあそばしていたので、とてもうれしく、年来お思いになっていた（娘を縁付けることと、みずからの遁世という）ご希望が、叶えられたようなご気持ちにおなりあそばした。

解答

問 1 (1) ㊦ (2) ㊦ (3) ㊦

問 2 (エ) 問 3 (オ)

問 4 (カ) 問 5 (エ)

問 6 係助詞 問 7 (ウ)

解説

問 1 辞書義を問う問題。

(1) について。「具す」は、漢語の動詞「具」をサ変動詞化して和語としたもの。だから、漢語と同義の「くが備わる」「くを備える」が第一義で、人や車を動作の対象とする場合、「くに従う・同行する」「くを連れていく・従える」という意味になる。

(2)について。「ほだし」は、「人の身の自由を束縛するもの」が辞書義だから、傍線部(2)を直訳すれば(ア)になるが、(イ)・(オ)でも通じるような気もする。そこでこの「去りがたきほだし」が何を表現しているのかを考えてみる。この語句は、4行目の父宮の言葉の中で使われているが、その前後の内容に着目。父宮は、「年ごろ去りがたきほだしとかかづらひ、後の世の勤めも、〴〵懈怠し侍りつるを、今よりは、一筋に行ひ勤め侍るべきなれば、いみじうなむうれしかるべき」と、長い間、「去りがたきほだし」と関わりあっていて、来世の往生を祈る勤行を怠っていたが、これからはできるようにするのでうれしい、と言っている。本文前の説明部分から、この話が、これから二人の姫君が新居に移ろうとしている場面であることを考えれば、父宮が長年関わりあって、ついつい仏道修行を怠ってしまった「去りがたきほだし」とは、「父宮の二人の姫君」のことであろうと想像がつく。すると、(イ)、(ウ)は該当しないことがわからう。また、父宮の言い方では、「去りがたきほだし」は、プラスの意味でとらえられてはいないから、(オ)の「固い結び付き」もあてはまらない。残った(エ)については、「去りがたき」とは、「立ち去り難き」の意で、「消し去ることできない」という訳にはならないので×。

ちなみに、「ほだし」の原義は、「馬の足にからませて、歩けなくする綱」のことであり、ここから、「罪人の手足の自由を奪う刑具」の呼称ともなり、中古では、「仏道修行を妨げるもの」の意で使われることが多い。また、「ほだし」が動詞化した「ほだす」は、現在も、「この男の情にほだされて」などと使われている。

「仏道修行」には、「心残り」＝「現世への執着」が妨げとなる。来世への極楽往生を願い、そのためには肉親の情も邪魔なものと考え、当時の思想を理解しておこう。

(3)について。「めやすし」は、「目安し」で、「見た目に感じがよい」という意味である。

問2 (Ⅰ)は「体言に準ずる語句を作る」のだから、該当するものは、「べき」の下に、「こと」「もの」「とき」「ひと」等が省略されていると考えられるものである。(Ⅱ)は、「係助詞を受けて結ぶ」のだから、同文中の上の文節に、結びに連体形を要求する係助

詞「ぞ」「なむ」「や」「か」「やは」「かは」があるものである。(Ⅲ)は、「下の語を修飾する」のだから、「べき」の下に体言があるものである。

したがって、簡単な見分け方は、直下に用言か助詞・助動詞が接続していれば(Ⅰ)、文末にあれば(Ⅱ)、直下に体言が接続していれば(Ⅲ)ということになる。

①は、直下に「なり（＝断定の助動詞）」が接続し、「べき」と「なり」の間に「心づもり」などの語が省略されていると考えられるから（Ⅰ）。

②は文末にあり、同文中の上に「かは」があるので（Ⅱ）。

③はセリフの文末にあり、上に「なむ」があるので（Ⅱ）。

④は直下に「別れ」という体言があるので（Ⅲ）。

⑤は直下に「も（＝係助詞）」が接続し、「べき」と「も」の間に「こと」などが省略されていると考えられるので（Ⅰ）。

⑥は直下に「老いしらへる女房」があり、「女房」という体言を修飾しているので（Ⅲ）。

問3

掛詞は、同音異義語を利用し、一語で二つの意味を表す技法である。具体的な事物の様子を述べているようにみせかけながら、自分の心理を述べる場合が多い。「あき（秋と飽き）」、「まつ（松と待つ）」、「ふみ（文と踏み）」、「よる（夜と寄る）」、「かる（枯ると離る）」、「ながめ（長雨と眺める）」など、慣習化されているものは覚えておこう。見つけ方は、まず和歌を直訳してみても、スムーズに流れていかない箇所、上の語意と下の語意に齟齬をきたしてしまう部分に着眼しよう。そこに掛詞が存在していることが多い。その語句の同音異義語を考えよう。

この和歌では、「なくなく」が、「出づべき方も」無く」と「泣く泣く（ぞ行く）」の掛詞となっている。

問4

傍線部(b)の和歌は、本文の話の流れから、父宮とともに吉野に隠棲していた二人の姫君が、大将とともに都の新居に出発する場面、父宮と姉宮の和歌に比べて、妹宮が自分の心境を述べたものであることをおさえておこう。

ここでは、本文の和歌の区切れをおさえて、区切れごとの解釈を比較することで、選択肢をしぼっていく。

本文の和歌は、「いづかたにまし」でまず切れている。ここまでの選択肢の解釈を比較すれば、(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ)・(カ)がそれぞれ同じである。「いづかた」は、「どちら・どこ」の意の疑問代名詞であり、「まし」は、上の疑問語を受けて、「くしようか、くしたのだろうか」といったためらいの気持ちを表す語である。したがって、この二語のみを直訳すると、「どこに（くしようか（くしたのだろうか）になる。こう訳しているものは、(オ)・(カ)だけである。(ア)・(イ)は、「どこに出て行くのかもわからないこのわが身」と解釈しているが、この解釈に直接該当する部分が本文の和歌になく、また、妹宮はすでに大将・姉宮と一緒に

に都にいくことになっていることが、本文前の説明文でも、本文1行目でも書かれているから、これはおかしい。(ウ)・(エ)は、疑問もためらいの意もないので×。

(オ)・(カ)の解釈の違いは、三句め以降を、(オ)では父宮と姉宮の心情とし、(カ)では、妹宮の心情としている。語法面から考えれば、「惜し」は人物の主、体的な感情を表す語であるから、この歌の読み手である妹君の感情を表していると解釈するのが自然である。また、この問4の解説の最初でも述べたように、この歌は、本文から、父宮と姉宮の和歌に比べて、妹宮が自分の心境を述べたものだと考えられるから、正解は(カ)になる。

問5 傍線部(c)という行動は、その前の、「宮も」とおぼして、「から続いていることに着目。この「宮」とは、「吉野の宮」のことだから、この「おぼす」の内容が、解答の根拠となる。

「宮」は、ここで、「やがてついでに渡し奉りて、我は一筋に思ひ置く事なくて」と思っているが、何を「一筋に」思い、後は思に残すことのない状態にしておこうと考えているのであろうか。父宮の考えが書かれている部分を本文の他の部分から抽出してみると、4～5行目に「年ごろ、今よりは、一筋に行ひ勤め侍るべきなれば、うれしかるべき」、また、19～20行目で、「宮は、一筋に行ひ勤めさせ給ひければ、いみじくうれしく」とあることから、それは、「仏道修行」であることがわかる。父宮は、仏道に専念するために、姉宮が大将に迎えられるこの時に、妹宮もさらには老女房までも自分の庵から出し、都に行かせるのだと判断できる。したがって正解は(エ)。残りの選択肢はどれも、本文に書かれている内容からは読み取ることができない。

問6 付属語の「なむ」には、①係助詞と②終助詞と③強調の助動詞『ぬ』の未然形+推量の助動詞『む』の連語の三つがある。Xの場合、「いみじう、なむうれしかるべき」と、「うれし」と「うれし」を修飾している形容詞の連用形ウ音便「いみじう」の間に入り、なくても文意が通じってしまうこと、さらに文末にある「べき」が、「べし」の連体形となっていることから、係助詞の「なむ」である。

問7 本文の最後に書かれている、都へ行く娘二人を見送る父宮の心情に着目しよう。父宮の思いは、「宮は、いとうれしく、かひある様と見送り聞こえ給ふ。名残なくかい澄む心地して、心細くおぼさるれど、一筋に行ひ勤めさせ給ひければ、いみじくうれしく、

年ごろおぼしめる本意、かなひ出でぬる心地せさせ給ふ」(本文19～20行目)と記されている。ここで、二度出てくる「うれしく」に注目しよう。最初の「うれし」は、「かひある様」と見送って、こう感じているのである。つまり、二人の娘に幸せな将来が約束されたことに対する喜びを表している。そしてもうひとつの「うれし」は、「一筋に行ひ勤めさせ給ひければ、うれし」だから、この後、自分がやっとなんばに専念できるようになった喜びを表している。さらに自分から離れて行く娘を見送る父宮の心境として、「心細くおぼさるれど」があることもみのがせない。

したがってこのふたつの喜びと、一抹の寂しさを表現している選択肢が正解である。

(ア)は、「やむをえず、二人の娘の養育にかかずらわっている」が×。父宮は、確かに仏道修行に専心したいと思っではいるが、だからといって、それまで、二人の姫宮をいやいや育てていたわけではない。

(イ)は、「上の娘くさせて、下の娘とく考えていた」が×。父宮がここまで詳しく考えていることを裏付ける根拠が本文中にない。

(エ)は、「しいてゝ寂しさを感じている」が×。宮は、これからは、来世での往生だけを祈ることができることをうれしく思っている、娘との別離をこれほどは悲しんでいない。

(オ)は、「長年仕えなれた女房たちもゝ行ってしまった」が×。父宮が女房との別離を嘆く場面は本文には出てこない。